

ブラジル黒人の居住空間に関するノート

荒 井 芳 広*

Notes on the Residential Spaces of Brazilian Blacks

Yoshihiro ARAI

Abstract

The purpose of this article is to make a rough sketch of the history of the residential spaces that the Brazilian black experienced since the colonial period. Based on this work we can show the conditions in which the Brazilian blacks survived and also understand how they expressed their ideas through the uses of these spaces.

はじめに

本稿は、ブラジル黒人の宗教とフォークロアについて筆者がこれまでに書いた⁽¹⁾あるいはこれから書く予定の論稿に対する一種の註として、ブラジル黒人がこれまでに生活を営んできた生活空間のうち、主として居住空間のいくつかの類型について整理し解説を試みることを目的としている。自然的かつ社会的空間としての植物的環境に関して、ハイチを例に同種の注解的ノートを試みたことがあったが⁽²⁾、同じような考察はブラジル黒人にも可能であろうし、反対にハイチにおける居住空間の歴史を辿ることも可能である。というよりむしろ、本稿も、こうした比較を念頭に置いている。

さてブラジル黒人の歴史は、奴隷制に始まる。従ってブラジル黒人の最初の空間体験は奴隷運搬船であり、アフロ＝アメリカンとしてのブラジル黒人の文化そして社会関係の最初の形態もこの空間のなかで生まれた⁽³⁾、と言ってもよい。そこで生まれた社会関係や文化の研究も重要であるが、本稿では、アメリカ大陸についてからアフリカ系住民が体験した空間体験に限定してそれを時間を追って辿ってみたい。本稿は、もう一つ、ブラジル黒人の奴隷としての体験を砂糖プランテーションでの労働に限定している。アフリカ人奴隷

の労働力が利用されたのは砂糖プランテーションに限らず、鉱山労働ほか様々に利用されてきたからである。

ドゥブレーとヴォーチエ、G・フレイレ

次にもう一点、最初に述べておきたいのは、このブラジル黒人の居住空間に関する歴史人類学にとって基礎となる研究資料を使いながら、それらの研究資料の重要性を知ることが、本稿の目的の一つだということである。そしてこれらの研究資料のなかでも特に重要であり、本稿でもたびたび言及し、依拠するのがドゥブレーとヴォーチエ、G・フレイレである。ドゥブレー(Jean Baptiste Debret, 1768-1848)は、1816年から1831年までブラジルに滞在したフランス人画家で、この時の見聞を『ブラジルへの絵画的歴史的な旅』(DDEBRET, 1834-1839)という著作として出版した。この著作、特にそこに挿入された彼自身の手になる石版画は、写真のなかった時代の記録として、この時代のブラジルを知るうえで重要な資料とされ、多くの歴史家が、単なる参考資料としてではなく、それら自体が分析の対象となって、家族関係、経済関係、社会関係に関する構造化された情報として活用されている⁽⁴⁾。一方、ヴォーチエ(L.L. Vautier)は、ドゥブレーより少し遅れて、1840年から1846年までブラジルに滞在した建築家で、この滞在期間に彼が行ったブラジルの建築に関する観察を、友人及びフランスの建築雑誌に送った書簡と日記に残している。ドゥブレーとヴォー

1993年9月29日受理

* 一般科

チエが観察を行った時期には多少のずれはあるものの、いずれも王制から共和制への移行期、奴隷貿易はまだ盛んに行われていたが、一方では奴隷制廃止へ向かって、人々の生活の中心が都市へと移行する時期に当たっており、前者は建築の外観と内部、街路や風景、後者は建築の構造、間取り、材料について、と両者の資料は相互補完的な情報を提供してくれる。後者に対して特に注目したのが、一地方、すなわちブラジル北東部、特にペルナンブコ州を拠点として、ブラジル社会についての歴史人類学的考察を展開したG・フレイレである(FREYRE, 1940)。彼の主著である『大邸宅と奴隷小屋』(FREYRE, 1933)とその続編ともいえる『ソブラードとムカンボ』(FREYRE, 1936)は、植民地時代から19世紀の共和制にいたるブラジル社会、とりわけ白人と黒人の社会関係に関する考察中心に据えた社会史ないし歴史人類学的著作であるが、それら著作のタイトルには、この社会関係を象徴するものとして、ブラジル史に現われた住宅の類型(Casa-Grande, Senzala, Sobrado, Mucambo)が用いられている。G・フレイレ(Gilberto Freyre, 1900-1987)は、住宅類型を単に比喻として用いているばかりでなく、住宅そのものについての論稿、著作も持っている(FREYRE, 1979)。これら三人の業績は、本稿でその素描を試みるブラジル黒人の空間人類学の欠くことのできない基礎である。その例証として、複数の研究者が注目し利用しているドゥブレーの「家族と散歩する役人、リオ・デ・ジャネイロ、1820年」と題する版画(図-1)を取

り挙げよう。この版画は、筆者の知るかぎりでは、三人の著者がその分析に利用しており、そのうち歴史家のM.R.N.・ダ・シルバの『街路の黒人、奴隷制の新局面』(da SILVA, 1988)とS.L. グラハムの『住居と街路、19世紀リオ・デ・ジャネイロにおける従僕と主人の家内世界』(GRAHAM, 1988)のいずれもこの版画を本の表紙に使っている。分析の内容は、後章と関係するのでそちらに譲って、時間的順序にしたがって砂糖のプランテーションにおける黒人奴隷の空間体験から検討してみよう。

§1 現実的空間

砂糖プランテーションに働くブラジル黒人が最初に体験した建築的空間は、寝る部屋として与えられた「奴隷小屋」と身の回りの世話や自分たちの住宅の維持管理に必要な下働きのためにプランテーション所有者の家族が身近に置いた家内奴隷にとっての「大邸宅」である。図-2は、G・フレイレの『大邸宅と奴隷小屋』に掲載されている「ノルエガ甘薯園」の見取り図である。奴隷の住宅である奴隷小屋もその主人たちの住居である大邸宅も、広大な砂糖黍畑のなかに位置する敷地のなかに、収穫した砂糖を精製するための工場や家畜小屋などとともに建立され、奴隷たちの日常世界を構成していた。

- 1 カーサ・グランデ (casa-grande)
- 2 上方の奴隷小屋 (senzala de cima)



図-1 「家族と散歩する役人、リオ・デ・ジャネイロ、1820年」

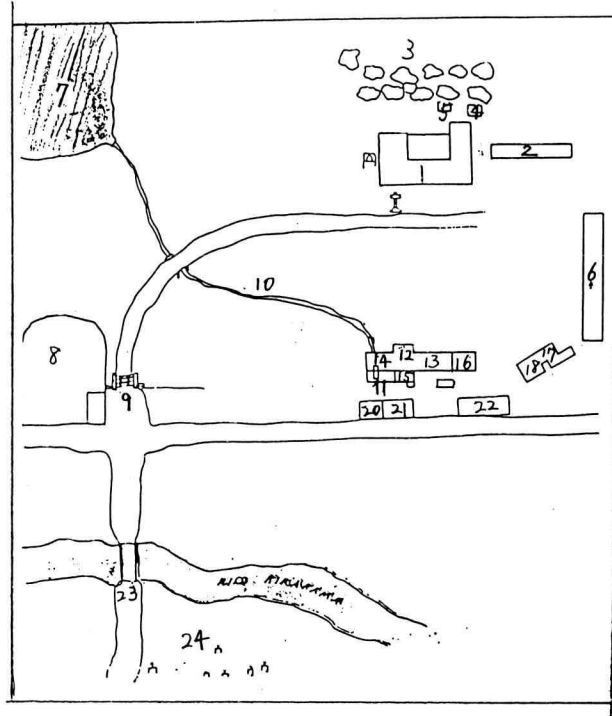


図-2 「ノルエガ甘蔗園」(FREYRE, 1992)

- | | |
|----------------|--------------------|
| 3 果樹園 | (pomar) |
| 4 鶏小屋 | (gallinheiro) |
| 5 豚小屋 | (chiqueiro) |
| 6 奴隷小屋 | (senzala) |
| 7 堰 | (açude) |
| 8 家畜用柵囲い | (curral) |
| 9 門 | (porteira) |
| 10 水路 | (levada) |
| 11 水車 | (roda do engenho) |
| 12, 13 精製所 | (casa de purgar) |
| 14 砂糖黍置き場 | (picadeiro) |
| 15 ボイラー室 | (casa da caldeira) |
| 16 倉庫 | (encaixamento) |
| 17 粉小屋 | (casa de farinha) |
| 18 あぶみ小屋 | (estribaria) |
| 19 糖蜜貯蔵槽 | (tanque dfe mel) |
| 20 蒸留所 | (distillação) |
| 21, 22 絞りかす置き場 | (casa de bagaço) |
| 23 橋 | (ponte) |
| 24 墓地 | (cemiterio) |

§ 1-1 奴隷小屋 (senzala)

ペルナンブコ州の砂糖プランテーションを調査したダ・シルバ (da SILVA, 1990: 1-272) に拠れば、調査した 150 の砂糖製造工場のうちかつての奴隷小屋であったと思われる建物が残っているところは 0.5% にも満たない。しかも奴隷制廃止 (1887) より後、現在残っているセンサーラが当時と同じ使い方がされているかどうか確かめることはできない。それには次のような理由があるという：

(1) ダ・シウバの調査した砂糖プランテーションの多くが奴隷制度廃止後につくられた。

(2) 奴隷小屋の建築材料が今日までの保存に耐えるほどの質のものではなく、奴隷制の廃止によって使われなくなったことが、さらに消滅を速めたと思われる。

(3) 現在、奴隷小屋として残っているものでも、本当にそれが奴隷制廃止前に建てられたものか否かを判断することは難しい。

というのも奴隷制廃止後も砂糖プランテーションで働く労働者の居住条件はそれほど変わりはないかつし、彼らの住居の建築や改造についての記録など残されな

いことが多いからである。

幸い、1840年代の奴隷小屋について、上記のフランス人建築家のヴォーチエが書いているものが残っている(図-3, VAUTHIER, 1975: 50):

「人間の住居がこんなにも単純な表現にまで縮小できうと考えるのは難しい。3m ないし 3m 半の正方形の部屋で、床は土間のままだった。表の小さな回廊に面したドアが唯一の予め造られた開口部であった。壁は、粗末な粘土壁で、……。この狭い部屋に一家族全員か三人の独身者が入れられた。」

(VAUTHIER, 1975: 91)

センザーラに住む大部分の住人は、砂糖キビの畑で働く農業労働者であり、労働の場は畑であったが、甘蔗園内の砂糖精製場もまた彼らの労働の場であった。

§ 1-2 カーサ・グランデ(大邸宅 casa-grande)

カーサ・グランデは、砂糖プランテーションの場合、そのプランテーションの所有者(senhor)の居宅である。カーサ・グランデを、砂糖プランテーション地域ではない農村部の住宅と区別して建築史的に正確に定義することは難しいとされている(G.G. da SILVA 1990: 407-488)。例えば G・フレイレはカーサ・グランデの独創性を次のように強調するが:

「ブラジルのカーサ・グランデについて、それは建築の発展の社会学的解釈と対応するということが言える。繰り返す言うが、その出現は建築にいかなる顕著な伝統とも結びつかない。機能も状況も自前のものである。建築的には基層から表層へと出現したことは明らかである。芸術的なエリートの伝統以前の集会的かつ匿名的な社会的インパクトと対応する。そしてそれには様々なヴァリエー

ションがある。」

(FREYRE, 1985: 19)

G・フレイレによれば、カーサ・グランデは、これに付属する礼拝堂や奴隷小屋などとともに、アフリカからやって来たばかりの奴隷が、新しい環境へ順応するための場であった。この場合、新しい環境とは、砂糖キビ畑の自然環境と労働体制、キリスト教、そして白人の主人との社会関係などが含まれており、当然のことそれはアフリカ人にとって奴隷という新しい身分を受け入れることであった。なかでも主人との関係においてブラジルは新大陸の他地域と比較して独特の生活システムを発展させた。それは白人の主人とアフリカ人奴隷のあいだの性的関係で、カーサ・グランデに住むポルトガル人の主人と奴隷小屋の女たちのあいだの性交渉は比較的自由に行われた。その舞台となったのがカーサ・グランデであり、この空間でポルトガル人の主人を家父長とする一種の大家族を形成されたというのが、『大邸宅と奴隷小屋』で示した G・フレイレの見解であった。この見解は、建築史の立場から、また社会科学からも批判がなされている。建築史的に見た場合、甘蔗園所有者の住宅には年代や地域によって様々なタイプがあり(da SILVA, G.G., 1990, AZEVEDO, 1990), 必ずしも、様式的に見てブラジル独自とは言えないとされる(SMITH, 1979)。社会学的にも、G・フレイレが「家父長的」と言う時には、新大陸の他の地域に比較しブラジルの奴隷制が温情的であったというようなニュアンスがあるが、これについての議論は別の機会に譲るとしても、少なくとも白人の主人の家族にとって奴隷との前記のような性的関係が子弟の教育に対して与えた道徳的影響とその後のブラジル社会の発展への影響を考えると手放しで賛美することはできないという批判も多い。

先に述べたようにカーサ・グランデには歴史的に見て様々な類型があるが、奴隷小屋などの他の住宅類型との比較のために、パイア州カショエイラにある甘蔗園のカーサ・グランデの間取り例を挙げておこう(図-4, da SILVA, G.G., 1990: 110)。

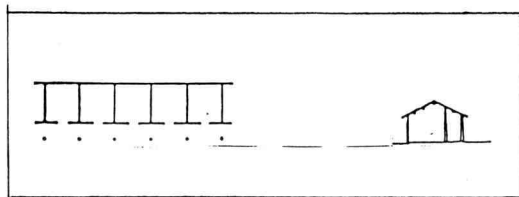


図-3 センザーラの間取

- 1 寝室(cela) 2 便所(saniário) 3 中庭(pátio)
- 4 小部屋(quarto) 5 ホール(saguão) 6 宿舍(alojamento)
- 7 空き部屋(desocupado) 8 台所(cozinha) 9 代理人の事務室(gabinete do

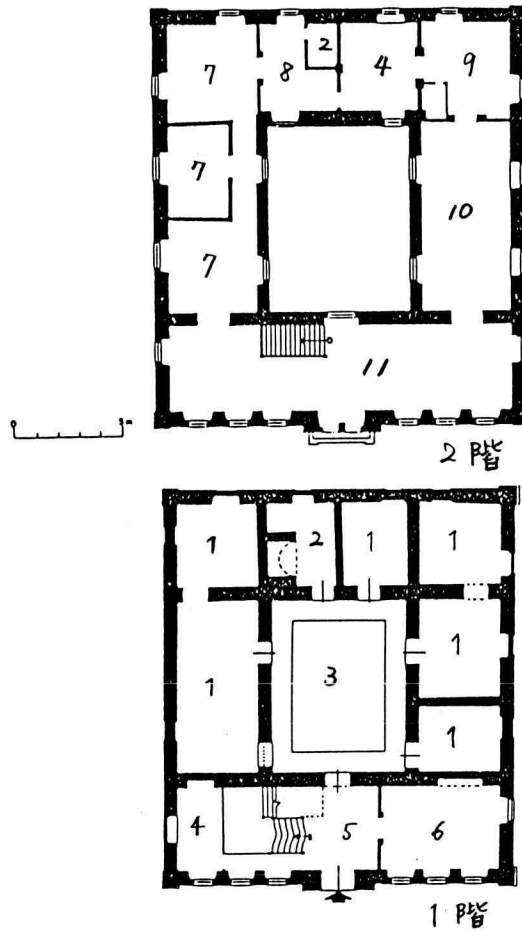


図-4 カーサ・グランデの間取り

delegado) 10 秘書の事務室 (gabinete do
escrivão) 11 居間 (salão)

カーサ・グランデの内部で働く家内奴隷の仕事はさまざまあるが、家のなか、すなわち「ドアの内側」の仕事かドアの外側の仕事かで二つのカテゴリーに分れ、後者は前者に比べ低い評価が与えられている。「ドアの内側」が最も集中しているのは台所の仕事である。料理の下ごしらえから、調理、盛り付け、食堂でのサービス、コーヒーの準備など多彩な能力が要求される。そのほか各種の掃除、照明などの仕事もあるが、カーサ・グランデの主人、その奥方や家族といちばん親しい存在であったのは、乳母と部屋付き女中とお針子であった。「ドアの外側」の家内奴隷の仕事には、洗濯、

水運び、食料の買い出しなどがある。これらの家内奴隷は全体としては、プランテーションや砂糖精製場で働く奴隷と対立していた。

カーサ・グランデという空間でのブラジル黒人の仕事は、都市郊外や都心に造られた主人の住宅であるソブラードでもほぼそのまま受け継がれたが、家内奴隷の第二のカテゴリーであるドアの外側の家内奴隷は、多くの仲間と、特に家の外に広がる街路や広場で会うことになる。

§1-3 都市化

19世紀にはいると、ブラジルの諸都市（特に沿岸部の諸都市）の発展と都市への人口移動によって、奴隷制の意味が変化してきた。奴隷貿易および奴隷制に反対する国際的風潮が高まってきたにもかかわらず、実

際には、この世紀になってからも新たにアフリカから移入された奴隷はかなりの数に昇った。変化したのは奴隷労働を求める階層の変化であった。この時期になると誰もが(小規模農園主, 商人, さらにほとと奴隷であった自由身分の黒人さえ), その可能性があれば奴隷労働を用いようとする傾向が広がった。すなわち奴隷制という制度以上に、この制度に依存して暮らそうとするメンタリティー, すなわち奴隷主義的イデオロギーが蔓延した時期であった。従って奴隷が従事した仕事の種類はプランテーションでの労働やカーサ・グランデの家内労働より多様化した。奴隷の「異なったカテゴリー」を形成した。その多くは都市での細かなつらい仕事であった。彼らの労働の場は、農園や砂糖精製場のよう単調で規制に縛られることはなかったが、反対にその仕事は厳しいものであった。

1888年, 奴隷制の廃止が宣言されたが、公共的な場での彼らの地位は急激には変化しなかった。つまり広場や街路の日常生活での風景はあまり変わることがなかったのである。そのかわりに彼らが見いだしたのは、家の内側での私的な生活であり、同業者団体, カトリックの信者組織やアフロ・ブラジリアン宗教の教団, カルナヴァルの行列組織などの結社, すなわち人と人の結合の諸形態であった。

こうした都市化の進展に伴う、奴隷主義的なイデオロギーから奴隷制廃止という社会変化のなかで、主要な居住空間であったのが、ソブラードとムカンボであった。

§1-4 ソブラード (sobrado)

ソブラードは、二階以上の階を持つ建物で、「大邸宅」(casa-grande)と同義に砂糖プランテーションや大農場所有者の住居を指す場合もあるが、本稿ではむしろ都市化のプロセスのなかでつくられていった都心部または都市郊外のソブラードについて述べたい。これらは、「大邸宅」の家父長的構造をそのまま都市に移し変えたものもあるが、とりわけ都心部のソブラードは商業という、農園主の大邸宅とは異なる経済的基盤の上に成立する建築物でもあった。19世紀初頭のレシフェのソブラードについてフランス人歴史家のF・モローは次のように記述している。「アメリカ人旅行家のダニエル・キダーによれば、レシフェの家屋は、ブラジルの他の都市の家屋に比べ独特の構造を持っている。例えば北米領事の住宅を見ると、それは六階建てで、一階ないしは倉庫(店)は、夜間は、雇人の部屋になる。二階は事務室、三階と四階は居間と寝室、五階が食堂、

そして台所である。これはG・フレイレの『ソブラードとムカンボ』に掲載されているL・カルドーソ・アイレスの素描(図-5)と同一のイメージである。この間取りの利点は料理の臭いが家のなかに籠らないことであり、欠点は水も含め総てのものを最上階まで運ばなければならなかった。従って水を運ぶ奴隷が階段から落ちたりすれば下の階が水浸しになる危険性もあった。」(MAURO, 1980: 127) この記述のなかにもあるように、ソブラードのこうした構造、そしてこの構造の上に成り立つ様々に日常的な行動は、奴隷労働があってはじめて成り立つ。さらに奴隷制度は、ソブラードという建築物の間取りの構造に対してばかりでなく、建築技術にも影を投げ掛けている。すなわち奴隷の労働力を自由に使えるということが、建築技術を道具や機会にたよらない、より原始的なものに留めてしまっていた、と言われる。

§1-5 ムカンボ (mucambo あるいは mocambo)

一方、『ムカンボ』は、ブラジル北東部において、貧しい社会階層の小さな家を指す言葉として用いられる。繰り返し述べるように、G・フレイレは、19世紀の都市化されたブラジル社会の白人と黒人の社会関係の変化を、都心のソブラードと都市周辺部のムカンボによって象徴させた。しかしこれら二つによってこの時代の住宅の総てを論ずることは極端すぎるであろう。同じようにこの時代の住宅を二つの類型に分類しながらも、ヘイス・フィーリョ (REIS FILHO, 1970) の分類とその基準の方がより一般化できると思われる。彼はこの時代の住居の主たる類型として、ソブラードと平屋住宅を挙げ、その一番大きな違いは床が敷いてあるか否か(すなわち土間)であるとしている。これらは類型であるから、現実には、もちろん床の敷いてある平屋もあるが、この基準は社会階層と住宅の建築的特徴との関連をよく説明していると思われる。上記の引用にあるソブラードの床の敷いていない土間の一階が奴隷または雇人の寝間として用いられたという事実はこの基準によって理解されるからである。

最底辺の社会層の住宅としてのムカンボは、社会地理学的には都市周辺部に分布していた。レシフェの例を取れば、社会的下層の居住地区は、古くは、旧市街の周辺部に位置する海岸に近い所に分布するが、比較的近年に形成された、同じ社会層の居住地区の多くは、拡大した市部の郊外のさらに外側に位置する丘陵部に分布している。

ムカンボの建築学的構造についてもG・フレイレは

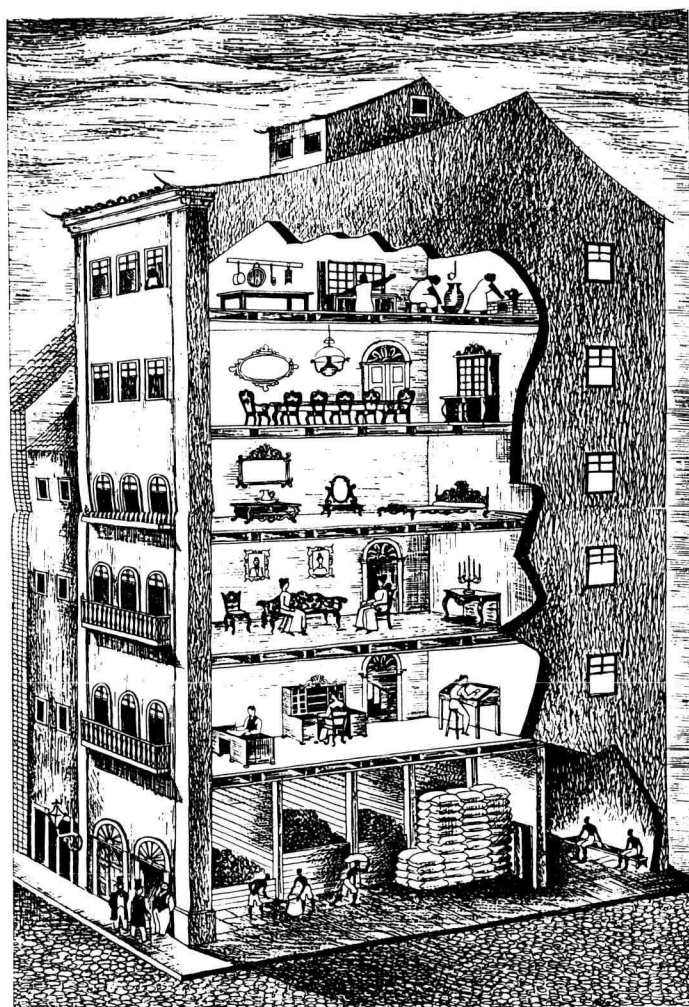


図-5 ソブラードでの生活：断面図

研究を発表しているがそのなかからムカンボの間取りの一例を挙げておこう（図-6）。

- 1 ヴェランダ (alpendile) 2 客間 (sala) 3 個室 (quarto) 4 個室 (quarto) 5 廊下 (corredor) 6 食堂 (sala de jantar)

§1-6 広場 (praça) と街路 (rua)

広場と街路は、公共的空間の一つである。都市化した19世紀初めのブラジルの諸都市では、奴隷や自由になった奴隷が、街路で様々な仕事をさせられたり、あるいは職業にたずさわる姿が見られるようになった。

それは、主人と黒人奴隷との関係が、大邸宅と奴隷小屋で象徴される時代とは異なる秩序の存在を可視化したものであった。

と同時に奴隷制の廃止以前の時代の光景を描いたドUBLEの版画は、街路はまた住居の内部での主人と奴隷との関係をそのまま表現する舞台でもあったことを例証している。その如実な例が冒頭でふれた「家族と散歩する役人、リオ・デ・ジャネイロ、1820年」と題する版画である。この絵は中流の役人が自分の住んでいる居住地区内への散歩のために家族を引き連れて住居の入り口をまさに出ようとするところを描いている。

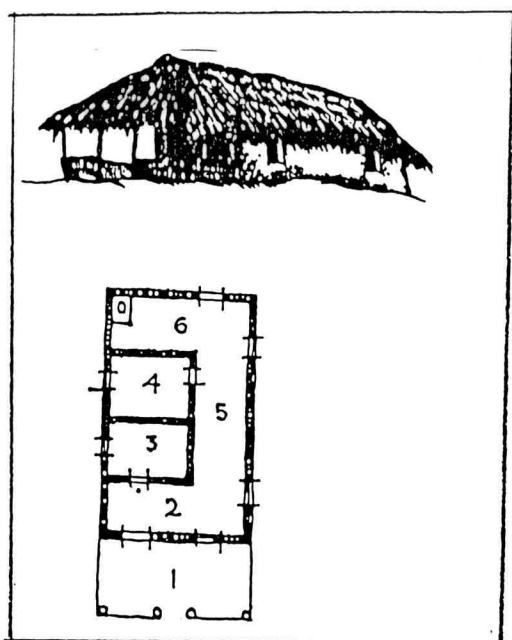


図-6 ムカンボの間取り

歴史家がまず注目するのは歩く行列の順番である。先頭には、この家の家長である当の役人が位置し、以下、二人の娘、役人の妻が続き、その後を、より肌の明るい役人の妻の身の回りの世話をする奴隷の小間使い、子守り女とその下働きをする奴隷の娘、主人のボディガード役の奴隷、二人の「見習中」の少年奴隷がさらに続く。この行列は、住居内での秩序をはばそのまま反映している。というより、服装が住居内にいるときよりも改まることにより、ある面ではそれぞれの社会的地位が強調されて表現されることになるからである。

この散歩（行列）が、大邸宅やソブラードの構造および使用法によって表現される既存の社会秩序の小宇宙を、より広い街路という世界で見せびらかし強調する一種の儀式だとしたら、街路や広場といった公共空間では、国王の戴冠式のパレードなどは既存の社会秩序の大宇宙の存在を知らしめる儀式である（DEBRET, 1834-39: 2-38）。つまり街路や広場は、秩序の儀式の場としての役割をもっていた。ブラジル黒人は、この儀式の場では、主役ではなく背景の外にあった。ただ日常の労働または経済活動においては、あるときは荷役奴隷として、あるときは様々な物売りとして、この空間に必須な登場人物としての地位を確保していっ

たのである。

広場と街路を比較すれば、両者は共通の性格を合わせ持つが、前者は、より公的であると同時により反秩序でもありうる。すなわち広場は日常的には、社会秩序を破ることはないが、より混合的でかつ異質性をもつ空間である。

広場の多くは教会を中心とするものであったが、教会は、奴隷にとっては主人の宗教的行為の場、価値体系の発進地であって、そこでは奴隷は疎外された存在であった。「大邸宅と奴隷小屋」の時代に家内奴隷と農業奴隷の対立は、主人の宗教であるキリスト教への改宗を受け入れるか否かによってあとづけられることが多かったが、教会という空間への接近もまた、公的にはキリスト教への改宗が条件であった。従ってブラジル黒人が公式的にこの空間を闊歩するには、黒人の信者団体を形成することが許されるという手段しかなかった。しかしブラジル黒人は、別な形でこの空間を解釈し、そこに侵入しようとして教会の正当なる支配者であることを主張するカトリシズムの神父と対立するのであるが、この非公式的な空間解釈を成り立たせる概念の体系の発進地が、アフロ・ブラジリアン宗教の礼拝所である「テレイロ」である。

§2 想像的空間：テレイロ（terreiro）とカルナバル

奴隷制廃止以前に自由な身分となったアフリカ系ブラジル人、獲得した自由が許した空間所有を単に住居として利用したのみではなく、この空間を社会的に与えられた価値の体系とは別の価値体系による構造化を試みた。こうした試みの例が、アフロ・ブラジリアン宗教のいわゆる教会である「テレイロ」と街路の祭りである「カルナバル」である。後者は一時的であるという限定条件のもとで、通常とは異なる街路の使用、自由な服装と行動が許される機会、この空間の創出は自発的であると同時に他発的である。これに対して「テレイロ」は、街路のような公的空間ではなく、住居という私的空間のほぼ恒久的な再解釈の形態の一つであり、アフロ・ブラジリアン宗教の発展と共に一つ一つの単位は小さいにもかかわらず、その数を増殖させてきた。「テレイロ」での活動は、宗教的な領域において支配的な価値（カトリシズム）と対立するなどの理由により禁じられたりまた隠れて行われたことがあったため、さらには私的空間でおこなわれるために、正

確な数を把握することが難しい状況にあるが、とりわけ都市地域においては、網の目のように「テレイロ」のネットワークが張りめぐらされている。テレイロは、支配的な価値体系（ローマン・カトリシズム、社会的ハリエラルキーなど）にとっては、自分らの体内（都市）に巣食う癌細胞のような存在となっている。

§2-1 テレイロ（terreiro）

テレイロは、簡単に言ってしまうと、ブラジル黒人宗教の集会場の通称である。ブラジル社会にテレイロが現われたのは19世紀の前半であるとされる。最初期のテレイロは、19世紀の前半に、自由身分の黒人たちによって設立されたといわれる。図-7は、R・ロディによるテレイロの概念図である（LODY, 1984: 30）。この概念図は、持ちうる要素の最大限を有するテレイロを概念化したもので、現実には、もっと単純なものからこのうちのいくつかの要素の組み合わせからなるものまでさまざまである。この概念図は、パイアのカンドンブレについての古典的な著作のなかで、E・カルネイロが行っている最初期のテレイロであるエンゼーニョ・ペーリョ（Engenho Velho）の建築学的記述にもあてはまる（CARNEIRO, 1948: 46）：

「主要な建物は、縦33.90 m、横10.20 mで、その一方の端には（集団の礼拝所である一筆者註）パハカンが、もう一方の端には食堂が……パハカンのかどから7.45 mのところ、小さなオショシの座（2.25 m×1.75 m）が……」

同じパイアのカンドンブレの研究（SANTOS, 1986: 33-38）のなかでは、この空間に対して次のような解釈があることが明らかにされている：

「テレイロは、その特徴も機能も異にする二つの空間を含んでいる。すなわち（a）私的および公的な使用目的を持つ建造物を含む「都市的」といってもよい空間と（b）アフリカの森と同価値である樹木と水源を含む「森」（mato）と考えられている空間……である。」

ブラジル黒人にとって、テレイロは、きわめて限られた空間のなかに広大なアフリカの森林と大宇宙が封じ込められている小宇宙であるが、それゆえにこの小宇宙は、世界に向かって拡大していく可能性を持っている。事実、ブラジル黒人は社会的自由とそれに伴う

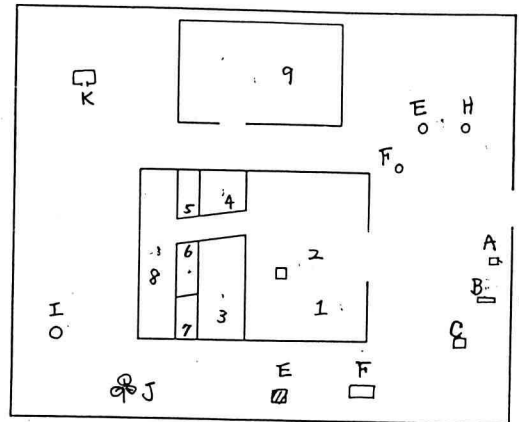


図-7 テレイロの概念図⁽⁵⁾

宗教的自由を少しずつ獲得していくに従って、これら二つの空間を拡大していく。「都市的」空間は、宗教集会場の数の増大と、カトリシズムとの習合による、キリスト教の教会をアフリカの神の祭壇の延長として捉える解釈によって拡大し、またイエマンジャーのようにブラジルの自然（この場合は海岸）の再解釈によって拡大する。それは黒人という社会的に見えない存在が、顕在化するプロセスでもある。

- | | | |
|---|----------|---------------------------|
| 1 | パハカン | (barrcão) |
| 2 | イシェー | (Ixé) |
| 3 | 男性用ホンコー | (roncô masculino) |
| 4 | 女性用ホンコー | (roncô feminino) |
| 5 | イヤバースノベジ | (peji das iabás) |
| 6 | シャンゴのベジ | (peji de Xangô) |
| 7 | オシャラーのベジ | (peji de Oxalá) |
| 8 | 調理場 | |
| 9 | 通常の住居 | |
| A | エシュのベジ | (peji de Exu) |
| B | オグンのベジ | (peji de Ogum) |
| C | オショーンのベジ | (peji de Oxóssi) |
| D | オモルのベジ | (peji de Omolu) |
| E | イレ・パレー | (Ilê Balê) |
| F | オサアンエの座 | (assentamento de Ossãe) |
| G | イロコの座 | (assentamento de Iroco) |
| H | オジュマレーの座 | (assentamento de Oxumaré) |
| I | 儀礼用の井戸 | |

J 礼拝用の草

K 鶏小屋

§2-2 むすび：交錯・矛盾・葛藤

ブラジルの黒人たちは、全員がそして全面的に、奴隷小屋やムカンボという劣悪な居住条件に満足し、そして大邸宅やソブラードで白人の主人たちと調和的に暮らしていたわけではない。また許された限定的自由のなかでの束の間の浮かれ騒ぎ（カルナヴァル）や密かな信仰世界（カンドンブレ、シャンゴ、マクンパなどのブラジル黒人宗教カルト）にのみ満足していたわけではなかった。奴隷小屋での叛乱は、逃亡奴隷によるバルマーレス王国の建設にまで発展したこともあった。テレイロやそこでの行動は、貧しい黒人たちの住居や居住地区を浸出して、カルナヴァルの行列となって街路や広場に踊り出たり、ある場合には、アフリカの神々と習合したカトリシズムの聖人の教会を、ブラジル黒人宗教カルトの聖所としてしまっている。こうした行為は明らかに主人たち白人がつくりあげ支配する世界に対する侵犯である。もちろん主人たち白人がつくりあげ支配する世界は不動のものではなく、奴隷制が廃止されたように、変化し瓦解もする。その実例が、逃亡奴隷が建設したバルマーレス王国の集落とその住居であり、サルバドールのセニョール・ド・ボンフィン教会のカンドンブレの信者によるラバージェン（お清め）である。本稿の目的は、都市を含めたブラジル黒人による建築的空間の使用の歴史をたどり、一つの思想的行為として把握できるになるための荒削りなスケッチをすることであり、詳しい分析は他稿に譲りたい⁽⁶⁾。

註

- (1) 荒井, 1992
- (2) 荒井, 1990
- (3) MINTZ & PRICE, 1976: 22-23, BASTIDE, 1961: 118-119.
- (4) ドゥブレの三巻の著書 (DEBRET, 1834-39) 所収の版画のうちブラジル黒人に関するのみ言えは歴史的資料にありうるのは、二巻以降である。
- (5) 1: (brracão) 儀礼的なダンスに用いられる大広間。広義には宗派の集会所を指す。2: (Ixé) 聖なる柱。3-4: (Roncô) 小寝室; 宗派集会所に特

有の部で、修道中の信者たちはお籠りの期間、この部屋に泊まり眠る。5-7: (Peji) カンドンブレにおいて個人的ないし集团的、あるいは両方の性格を持った礼拝の場。各テヘイロの歴史とその守護霊に基づく宗教的根拠となる聖なる空間。5: (Iabá) 女性の神格およびこれらの神格を信仰する信徒の総称。儀礼の料理の主たる担当者たち。6: (Xangô) アフロ=ブラジル諸宗教でも最も知られたヨルバ系の神格。戦闘の神。北東部の諸州 (Pernambuco, Alagoas, Sergipe) では、アフロ=ブラジル宗教の呼称となっている。カトリックの聖人、聖ペドロ、聖ジェロニモ、聖ヨハネと習合されたことがある。7: (Oxalá) 創造と水と人の繁殖の神。キリスト (Nosso Senhor do Bonfim) と習合。

A: (Exu) オリシャ（神霊）と人間との橋渡し役の霊、道のオリシャ。カンドンブレの総ての儀礼の開始役。B: (Ogum) 鉄、狩、戦争のオリシャ。C: (Oxóssi) 猟師、食糧、森の守護役のオリシャ。D: (Omolu) 人間と自然の変身のオリシャ。E: (Ilê) テレイロのなかにある特定のオリシャのための小さな建造物。(Balê) 大地の主。F: (Assentamento) テレイロの敷地のなかにあり石または小さな建造物。通常、ベジ（前記）と考えられている。(Ossãe) 薬草および礼拝用の草のオリシャ。植物すべての主。G: (Iroco) 気象と時間のオリシャ。H: (Oxumaré) 虹のオリシャ。水と富の神格。

- (6) 荒井, 1994 は、教会という空間をめぐる諸宗教の交錯についての考察の試みである。

参 考 文 献

荒井芳廣

- 1990 「研究ノート：ハイチ文化における植物的空間」, 『神奈川工科大学研究報告 A』
- 1992 「レシフェのカルナヴァルと黒人フォークロアの形成」, 中牧弘允編『陶醉する社会：中南米の宗教と社会』, 平凡社
- 1994 (刊行予定) 「教会の扉の記号学：ブラジル民衆宗教の世界」, G・アンドラーデほか編『ラテン・アメリカの宗教と社会』, 新評論
- AZEVEDO, Esterzilda Berenstein de
- 1990 *Arquitetura do Açúcar: Engenhos do Recôncavo Baiano no período colonial*, São Paulo: Nobel.
- BASTIDE, Roger

- 1961 *Les religions africaines au Brésil*, Paris: PUF.
- CARNEIRO, Edison
- 1948 (1977) *Candomblés da Bahia*, Rio de Janeiro: Civilização Brasileira.
- CUNHA, Marianno Carneiro da
- 1985 *Da Senzala ao sobrado: arquitetura brasileira na Nigéria e na República Popular do Benin*, São Paulo: Nobel.
- DEBRET,
- 1834-1839 *Voyage pittoresque et historique au Brésil ou séjour d'un artiste français en Brésil depuis 1816 jusqu'en 1831 etc.*, 3 vols., Paris: Firmin-Didot.
- FACULDADE DE ARQUITETURA E URBANISMO DA UNIVERSIDADE DE SÃO PAULO
- 1975 *Arquitetura civil I: Textos escolhidos da revista do instituto do patrimônio histórico e artístico nacional*, São Paulo: FAUUSP & MEC-IPHAN.
- 1975 *Arquitetura civil II: Textos escolhidos da revista do instituto do patrimônio histórico e artístico nacional*, São Paulo: FAUUSP & MEC-IPHAN.
- 1975 *Arquitetura civil III: Mobiliário e alfaías, Textos escolhidos da revista do instituto do patrimônio histórico e artístico nacional*, São Paulo: FAUUSP & MEC-IPHAN.
- FEEYEE, Gilberto
- 1940 *Um engenheiro francês no Brasil*, Rio de Janeiro: José Olympio.
- 1979 *Oh de Casa! em torno da casa brasileira e de sua projeção sobre um tipo nacional de homem*, Recife: Instituto Joaquim Nabuco de Pesquisas Sociais.
- 1981(1936) *Sobrados e mucambos: Decadência do patriarcado rural e desenvolvimento do urbano* (6.ed.), 2 vols., Rio de Janeiro: José Olympio.
- 1985 *Arquitetura, sociedade e cultura nos trópicos*, in *Anais do I Seminário Nacional de Arquitetura nos Trópicos*, Recife: Editora Massangana.
- 1992 (1933) *Casa-grande & senzala: Formação da família brasileira sob o regime da economia patriarcal* (28. ed.), Rio de Janeiro: Editora Record.
- GOULART REIS FILHO, Nestor
- 1978(1970) *Quadro da arquitetura no Brasil*, São Paulo: Editora Perspectiva.
- GRAHAM, Sandra Lauderdale
- 1988 *House and street: The domestic world of servants and masters in nineteenth-century Rio de Janeiro*, Cambridge: Cambridge University Press.
- HOUSTON, James
- 1993 *A cidade modernista: uma crítica de Brasília e sua utopia* (trad. de *The modernist city: An anthropological critique of Brasília*, The University of Chicago, 1989), São Paulo: Companhia das Letras.
- JUREMA, Aderbal
- 1971 *O sobrado na paisagem recifense* (2. ed.), Recife: Universidade Federal de Pernambuco.
- LEMOS, Carlos A.C.
- 1989 *História da casa brasileira*, São Paulo: Editora Contexto.
- LODY, Raul
- 1984 *Espaço-Orixá-Sociedade: arquitetura e liturgia do candomblé* (2. ed.), Salvador: Ianamá.
- MARX, Murillo 1989 *Nosso chão: do sagrado ao profano*, São Paulo: Editora da USP.
- MATTA, Roberto da
- 1991 *A casa & a rua: Espaço cidadania, mulher e morte no Brasil* (4ª. ed.), Rio de Janeiro: Guanabara Koogan.
- MAURO, Frédéric
- 1980 *La vie quotidienne au Brésil au temps de Pedro Segundo, 1831-1889*, Paris: Hachette.
- MINISTÉRIO DA EDUCAÇÃO E SAÚDE
- 1940 *Diário íntimo do engenheiro Vauthier: 1840-1846. Serviço gráfico do ministério educação e saúde*, Rio de Janeiro.
- MINTZ, Sidney & PRICE Richard
- 1976 *An anthropological approach to the Afro-American past: a caribbean perspective*, Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues
- ORTIZ, Maria Cristina Marques & ALMEIDA HUE, Renata Stadter de

- 1987 *Minaçu e Recife: histórias de habitações e seus habitantes*, São Paulo: Projeto.
- REIS FILHO, Nestor Goulart
- 1970 *Quadro da arquitetura no Brasil*, São Paulo: Editora Perspectiva.
- SANTOS, Juana Elbein dos
- 1986 *Os Nãgô e a morte: Pãde, ãsêsê e o culto Êgun na Bahia* (4ª. ed.), Petrópolis: Vozes.
- SILVA, Geraldo Gomes da
- 1990 *Engenho e arquitetura, morfologia dos edifícios dos antigos engenhos de açúcar pernambucanos*, 2 vols., Tese de doutorado ao FAU/USP, São Paulo.
- SILVA, Marilene Rosa Nogueira da
- 1988 *Negro na rua: a nova face de escravidão*, São Paulo: HUCITEC.
- SMITH, Robert C.,
- 1979 *Igrejas, casa e móveis: Aspectos de arte colonial brasileira*, Recife: MEC, Universidade Federal de Pernambuco, Instituto do patrimônio histórico e artístico nacional.
- SODRÉ, Muniz
- 1988 *O terreiro e a cidade: a forma social negra-brasileira*, Petrópolis: Vozes.
- VAUTHIER, L.L.
- 1975 *Casas de Residência no Brasil*, in *Arquitetura civil I: Textos escolhidos da revista do instituto do patrimônio histórico e artístico nacional*, São Paulo: FAUUSP & MEC-IPHAN.
- WEIMER, Günter
- 1983 *A arquitetura da imigração alemã: um estudo sobre a adaptação da arquitetura centro-européia ao meio rural do Rio Grande do Sul*, Porto Alegre: Ed. da Universidade, UFRGS; São Paulo: Nobel.